

第 106 話〈華中鉱業〉の要約と参考資料

第 106 話〈華中鉱業〉の要約

岩戸鉱山会社が設立されたとき、土呂久鉱業所長に篠田恭三氏が着任。スズ鉱山の土台をつくった元パイロットの松尾一男さんは、土呂久を離れて千島列島の金鉱山開発へ。篠田氏も 3 年後には日中合弁の華中鉱業会社へ。鉱山関係者は戦時体制の前線に立たされました。

第 106 話〈華中鉱業〉の参考資料

106-1 土呂久鉱業所の組織

神崎三郎証人調書（1978 年 9 月 20 日宮崎地裁延岡支部）

305～

原告弁護士（長瀬幸雄） 証人が土呂久鉱業所に居たころ、その組織はどのようになっていますか。

神崎 所長、次に鉱務課長、そして経理係長、それから経理兼庶務の係員が 4 人くらいいました。

原告弁護士 鉱務課には、職員が何人くらいいましたか。

神崎 鉱務課長、それに現場の係長、職頭がいて、係長の下に 10 何人の職員がいました。

原告弁護士 鉱務課以外に課はなかったのですか。

神崎 他にはありませんでした。

原告弁護士 鉱山の従業員は、一番多い時で、何人くらいいましたか。

神崎 季節によって異なりますが、一番多い時で 300 人くらいで、その内男女は半々くらいでした。

106-2 土呂久鉱山の歴代幹部

佐藤常義さんの話（1979 年 4 月 20 日聴取）

中島会社というと、東京への大学出がきた。軍人上りは特に多く、みな事務所に座っちゃった。中島知久平が軍人じゃから、経歴とか調べずに、簡単に雇いよった。篠田さんのあとに神崎さんが来て、神崎さんは岡山の高校の先生か中学の先生じゃった。松尾は千島に渡って帰ってきた。ここが閉山する当時、また来ていた。

佐藤正七さんの話（1977 年 12 月聴取）

所長は篠田恭三さんじゃった。ぼくが鉱山の事務所に勤めだして、半年くらいでやめて、上海に行った。終戦まで行っていた。篠田は東大理学部地質科卒。そのあとの所長は神崎三郎。九大工学部採鉱科。事務所は若い者が3人。他の社員は、ほとんど大学出ばかり。社員は、われわれ、職頭入れて34、35人。全体で400～500人。最初は本雇の従業員250人、臨時の土方50人、合わせて300人くらいと社員、計330人前後。大学出ばかりだったので、社員の足の引っ張り合いはすごかった。すぐに本社に投書して、首切りとか。

佐藤仲治さんの話（1978年6月17日聴取）

はじめ、松尾一男が主任兼調査。昭和8年に中島になってから、所長は石黒。土方のような風さい。顔つきの悪い、色の黒い、5尺2寸くらいの小男。秋田鉱専卒業で34、35歳くらい。主任できた。石黒が来てから、松尾は鉱山の調査ばかりしていた。石黒が1年か1年半どもおったかな。そのあと真部義一が主任で来た。10年か11年。真部になったときは大規模だった。静岡県丹那トンネルにおった20何人を連れて来た。削岩夫、手繰り、枠入れの専門家を連れて来た。丹那トンネルはえらい水にこなされたらしい。真部のあと篠田恭三がきた。東岸寺の所長で来た。会計兼土呂久の責任者だった。中野内鉱山を開発するために、石黒主任は中野内に移転した。

戦前の土呂久鉱山幹部

歴代所長

松尾一男（主任）	昭和4年～昭和8年7月31日
石黒（主任）	昭和8年8月1日～？
真部義一（主任）	？～昭和11年初め
篠田恭三（所長）	昭和11年12月16日（岩戸鉱山設立） ～昭和14年9月（山神社に燈籠献灯）
神崎三郎（所長）	昭和14年9月～昭和16年11月（選鉱場火災）？
松尾一男（所長）	昭和16年11月～？

鉱務課長

江頭宗男

神崎三郎

職頭の頭 赤池梅夫

職頭 久世多四郎、甲斐博蔵、丸岡袈裟治、工藤伝太、渡辺銀蔵、馬場、

中島が「金」が国際収支決済上その重要である。それが為め地下資源の調査と金鉱開発に着眼するようになったのは前述の昭和 7 年頃からであり、その第一着手として北海道北見国の天竜鉱山を手に入れたが、それは失敗に終り、(略)偶然にも、その探鉱中に道南の千歳郡内に於いて頗る有望な既発見金鉱を知り、その山を買収し開発の結果、日本第 2 位の優良金鉱の折紙がつけられ、昭和 11 年 10 月遂に金鉱の開発に成功(千歳鉱山資本金 1 千万円と称し、編者の実弟が中島商事に派遣されていた)、次いで同年 12 月、九州に錫鉱山をも経営し、岩戸鉱山株式会社(資本金 1 千万円)を創立し、両者とも実弟中島門吉氏を社長として経営せしめ、昭和 18 年 3 月中島鉱山会社と改称、20 年 10 月中島産業会社とし、更に 26 年 8 月中島鉱山株式会社と 3 度改称した(両鉱山の鉱物は錫のほか、に硫化鉱、砒鉱、銅鉱、亜鉛鉱、鉛鉱が産出された)

北海道開発庁編「北海道の地下資源」P30 より

昭和 9 年(1934 年)千歳金山・伊奈牛銅山・糠平クロム鉱山などが発見された(略)。

昭和 12 年(1937 年)支那事変が起るとともに産金の積極的奨励策が講ぜられ、さらに戦局の進展に伴って、国内資源の増産が要請され、鉱業はいよいよ最盛期を迎えた(略)。

昭和 18 年(1943 年)金鉱業整備令の発布により、産金第一主義は一擲され、鴻之舞・千歳鉱山は、保坑鉱山として、沼の上・音羽鉱山は珪酸鉱供給鉱山として残されたが、そのほかの道内 30 金山は休山し、資材・設備及び従業員は銅・鉄・水銀などの軍需資材増産に配置転換された。

浅田政広著「北海道金鉱山史研究」より

本書の関心はむしろ準戦時、戦時下の金鉱山にある。その際、金鉱山の経営に劇的な変化をもたらすという意味で、政府の金政策の変遷は特に重要な意味を持つ。すなわち、明治 30 年(1897 年)の「貨幣法」によって決定された金 1 匁 5 円という「価格」は、産金奨励のために準戦時体制下の昭和 7 年(1932 年)以来引き上げられ、「日本銀行金買入法」(昭和 9 年)、「金準備再評価法」(昭和 12 年)等を経てさらに引き上げられていくにもかかわらず、対米英開戦に伴って貿易決済に世界貨幣としての金が不要となった途端に政策は 180 度転換し、ついには昭和 18 年の「金鉱山整備令」でほとんどの金鉱山が閉山に追いやられてしまうのである。これは、国際間信用の崩壊過程であると同時に、金が文字通り、軍資金あるいは戦争準備金として国家によって需要されていたことを物語っている。このような政策下で各鉱山および関係者等はどのように行動したのか、あるいは翻弄させられたのか。その姿をしっかりと見据えたいと思う。(P ii)

106-4 千歳鉱山株式会社

高橋竹蔵編「鉱山名鑑」(河出書房;昭和 16 年)

千歳鉱山株式会社

東京都麹町丸ノ内 2 の 16 明治生命館

電話 丸ノ内 (23) 548-9 (*岩戸鉱山 KK 東京出張所と同じ)
(北海道) 千歳

浅田政広著「北海道金鉱山史研究」より

千歳鉱山は支笏湖「湖畔」の対岸、美笛川河口から約 6~8 キロメートル上流に位置している。本金山は昭和 8 年 (1933 年) に発見されて以来、戦中の一時期、国家の金政策の転換によって休山・保坑を余儀なくされたこともあるが、終戦直後から再開し昭和 61 年 (1986 年) に至るまで操業を続けてきた数少ない金山の一つである。創業以来の産金総量は約 20 トン (銀約 90 トン) であり、これは道内では鴻之舞金山の約 70 トンに次ぐものである。(P231)

当時「満身是れ軍需品産業資本の化身」といわれた中島グループ (中島飛行機製作所、中島商事、富士合名等。実権者は政友会代議士中島知久平) は軍用飛行機製作で上げた利潤の再投資先の一つを北海道金鉱業とし、昭和 7 年からの政府による金「価格」引き上げの波に乗って、永泰金山 (後志)、札幌金山 (石狩)、天竜金山 (上川) 等を買収し、天竜では関係金山の鉱石を集中して製錬するため製錬所を建設中であった。また千歳金山買収と期を一にして札幌手稲の宮城沢金山も買収し、製錬所を建設している。すなわち、「中島金王国を確立せんとする意図」の下に、あるいは「国家的産業開発を建前に中島産金一大大国を目指」して、北海道金産業への進出を丁度はかっているところだったのである。(P233)

従業員は昭和 10 年 6 月末の 215 名から 4 年後の 14 年 6 月には 1200 名へと急増しており、最盛期には約 2000 名を数えたと思われる。このような状況は、突如として山中に一大鉱山街を現出させた。昭和 14 年 6 月現在で 450 戸、3700 名が住み、事務所、製錬所、従業員倶楽部の他、「配給所本支店 3 ヶ所、魚菜市场 3 ヶ所、小学校、青年学校、郵便局、請願駐在所、独身寮及び医療設備」、「大木工場」等が建ち並んでいた。さらに 200 戸の社宅や 1000 名の収容力を持つ公会堂を年内落成の予定で建設中であった。したがって最盛期の頃の人口はおそらく 5000 名を超えていたであろう。映画、演芸、浪曲、漫才等の娯楽は小学校を利用して適時開催されていたが、「会館」と呼ばれた「豪華版」の公会堂が竣工すると同時に、それらはそこで催されるようになった。(P238)

Wikipedia 千歳鉱山より

開鉱当初の鉱石は、鉱山から美笛の支笏湖畔まで自社線の軌道を利用したトロッコ。舟に積み替えて支笏湖を横断し、対岸の[王子軽便鉄道](#)湖畔駅で小型貨車に積み替え。軽便鉄道で[苫小牧駅](#)まで輸送した後、[国鉄](#)の貨車に再度積み替えて[上川町](#)の天竜精錬所 ([天幕駅](#)に隣接) まで運搬して加工した。あまりに運搬が煩雑なため、1941 年には山元に精錬所

を建設するなど輸送体制の軽減が行われたが、支笏湖の舟運は昭和 40 年代まで続けられた。

Wikipedia 天幕駅

歴史より

1935 年 9 月 千歳鉱山株式会社天竜鉱山精錬所竣工

1940 年 天竜鉱山精錬所閉鎖

106-5 松尾一男の金の探鉱

工藤速美さんの話（1979 年 4 月 20 日聴取）

川田のころから土呂久鉱山に行っちゃりました。坑外の建築の仕事で、甲斐穂蔵、佐藤常義、東岸寺の馬原けさよしなんかと。閉山まで勤めた。松尾一男さんに篠田恭三、神崎さんにも使われました。昭和 13 年ごろ松尾といっしょに千島に行った。根室から千島列島の一番手前の千島の国後島。そこの留夜別（りゅやべつ）村。金山があった。私どんが行く前に、別の人がやりよったそうです。篠田所長のころ行った。いつとき土呂久は所長が 2 人おった。それで松尾さんが千島に行った。松尾さんは成り上がり。石黒さんは採鉱課長だった。石黒のあと、田平採鉱課長。松尾さんは国後の金山に所長で行きなった。

「ほくゆう」金山を中島が買収した。前の方がやるときに選鉱場ができていた。成功しないうちに私たちが行った。そのとき 8 人くらい行った。私に小笠原磐城。松尾さんは千島にずっとおって、相当金を出した。土呂久がやまるころ帰ってきた。

千歳鉱山は苫小牧から王子製紙が鉄道敷いちゃった。そこの鉄道便を利用してから、中島がやりよった。この金山は大きかった。私どんが行く前に（国後に 13 年に行き、その帰りに寄った）に、長年やっておった。ここでもちょっと行って、家建てをやった。医者から何から鉱山におった。私は黄疸に罹って、中島の医者がおって、「自分とこ帰ったがいいかもしれん」と言われ、土呂久に帰った。何百人も従業員がおった。ここへんから、だいぶ行っちゃった。坑内入って、機械使ったり。

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P182~183 より

千島国は国後島の留夜別村へ、松尾一男が土呂久鉱山の土工を連れて、根室から北海の荒波を船で渡ったのは昭和 13 年のことじゃった。いっしょに行った土工は、小笠原磐城さんや弟の速美さんら 8 人。留夜別村には金鉱山があつての、中島がそれを買収して操業を始むるので、社宅や坑外施設づくりに土工が呼ばれた。（略）

漁業中心の国後島は、そんなところ金探しにわきたっておった。昭和 8 年にこの狭い島内の試掘箇所は 15 カ所、出願鉱区は 100 カ所にのぼるといわれた。戦争になれば、金の値打ちがぐんぐん上がる。支那事変のあと国が産金を奨励したこともあって、鉱山会社や鉱

山師が千島国に殺到した。

106-7 篠田恭三所長

山神社 献灯

昭和14年9月16日

岩戸鉱山株式会社 土呂久鉱山

篠田恭三 納

*9月16日は山神社の祭りの日

小宮高樹さんの話（1977年3月5日聴取）

東大理学部卒。地質学だったと思う。戦争中、技術者として中国へ探鉱に行き、戦後、長いこと抑留された。昭和35、36年ごろ死亡。

佐藤仲治さんの話（1978年6月17日聴取）

戦時中、シナの開発に住友から派遣されたもんばい。博士号をとった男。14年ごろじやったか、5、6人鉱山におった優秀な者連れて、シナに渡った。篠田だけ終戦後帰ってきて、第一次出水事故のとき、住友から調査に来た。住友とは相当深いつながりがあるはずじゃ。

佐藤正四さんの話（1978年7月9日聴取）

篠田さんが「華中鉱業」へ出られた。盛大な見送りをした。

米田嵩さんの話（1979年4月21日聴取）

出発されるので、岩戸神社まで送って写真を撮ろうということになった。私たちや鉱山へ行かず、直接神社に出た。挨拶があったはずじゃが、覚えていない。暑いころじやったですな。満州へ行くという話、頭の低いいい人、あんないい人はめったにみらん。私たちが、どんな汚れたかっこうしてくだりよっても、「ご苦労様です」と頭を下げよった。ちよつとできんですよ。奥さんも連れてきて、岩戸の町から通勤しよった。

所長交代の写真（佐藤アヤ子所有）

昭和14年ごろ、篠田恭三所長から神崎三郎所長に交代したとき、岩戸神社の前で写した。写っているのは、篠田夫妻、土持栄士、岩戸村助役の土持、竹内勲、駐在、甲斐伝蔵。

戦後の活動

1954 未利用鉄資源開発調査九州地方委員会名簿

委員 中島鉱山（株）新木浦鉱山本社顧問 篠田恭三

1955 にも同じ記載

1957 委員 中島鉦山 (株) 本社顧問

篠田恭三

106-8 華中鉦業

高綱博文「中支那振興株式会社概要及び研究成果・課題」より

中支那振興株式会社ハ左ノ事業ニ対シテハ投資又ハ融資ヲ為スモノトス

1. 交通及運輸ニ関スル事業
2. 通信ニ関スル事業
3. 電気瓦斯及水道ニ関スル事業
4. 鉦産ニ関スル事業
5. 水産ニ関スル事業
6. 前各号ノ外中支那ニ於ケル公共ノ利益又ハ産業ノ振興ノ為必要ナル事業

特殊ノ事情アル場合に於テハ中支那振興株式会社ハ政府ノ許可ヲ受ケ前項各号ニ掲ゲル事業ヲ自ラ経営スルコトヲ得

華中鉦業株式会社 (日本名) = 華中鉦業股份有限公司 (中国名)

設立年月日: 1938 年 4 月 8 日

法人格: 日中合弁による国民政府 (汪精衛政権) の普通法人

所在地: 上海北四川路 641 号

営業目的: 華中における鉄鉦並び鉦物に関する鉦業

資本金: 20,000,000 円

董事長: 磯谷光亨 副董事長: 沈粹陽

中国近代工業史資料第 2 輯 (「日中戦争史資料 4」所収) P130

振興会社の成立以前、華中鉦業が 1938 年 4 月に創立され、6 月中、維新政府実業部は評価委員を任命し、諸鉦山の価格を評価させた。評価価格は合計 1000 万円で、この額は中国側の「現物出資」とされ、別に日本側から 1000 万元が出資され、合計 2000 万元となり、華中鉄鉦股份公司の名義で、1938 年に正式成立した。その後同社はなお華中のその他の鉦産開発のため、今の名義に改めた。(略)

華中鉦業会社の業務の重点は、鉄鉦生産力の拡充に集中されたが、非鉄金属の鉦山にも同社は極めて注意し、浙江省内の杭州、湖州、象山の螢石は、久しく同社の統制・開発の下にあった。このほか、同社はマンガン鉦と硫化鉄鉦の採掘にも着手した。

樋口弘「日本財閥論 (下)」(昭和 15 年 12 月 14 日刊) P88

中支振興の仔会社で内地の財閥資本、大産業資本と結合しているものは頗る多い。華中

鉍業には内地の各鉄鉍、製鉄会社が出資し、華中蠶絲は片倉製絲の資本を以てしている。

東亜研究所「支那に於ける錫の生産と流動」(昭和 16 年 3 月) P4 より

今日、日本の錫の生産高は年約 2000 トン内外で我国需要の 18%を満たすに過ぎない。山錫がその主要資源で、明延(兵庫県)、三菱尾平(大分)、蔵内尾平(大分)、錫山(鹿児島)、見立(宮崎)の 5 鉍山に於て採掘され、大規模のものは明延鉍山一つである。(略)それにしても今日、世界錫産国の第 5 位にある支那が直接、間接、我国の錫需要の点から調査されなければならぬ点に於て等閑視すべからざることに変わりないであろう。